

はじめに

2020年、世界中が新型コロナウイルスの感染拡大という未曾有の事態に直面し、私たちのまわりでは、しばらくの間、多くの伝統的な祭りや公演が中止となりました。この間、「一度立ち止まって、守ってきた伝統に向き合い、次世代に何を伝えたいのかを考える時間を得た」という声も多く耳にしました。真摯に向きあったからこそこの決断として、新たな形の伝承に踏み切ったところ、自分たちの代で長年の伝統の幕引きをするという苦渋の選択をしたところなど、様々でした。

あらゆる伝統音楽・芸能の伝承基盤が転換期を迎えるとともに、それらを核としたまちづくりや、異文化コミュニティとの共生と包摂もまた、人々の移動と交流が激減する中で、新たな展開が求められるようになりました。そうした先が見えない不安を誰もが抱えていた2022年4月、本事業「伝承を担うフィールドからまなび、ともにつくり、地域へつなぐアートマネジメント人材育成ー伝統音楽・芸能の地域レガシーによる新たな価値創出を目指してー」（令和4年度～令和6年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」採択事業）はスタートを切りました。

伝統音楽・芸能の多くが活動の場をオンライン上に求め、LIVE配信の技術も急速に進んだこの時代に、敢えて「伝承のフィールド（現場）におけるリアルな体験」を核としたのは、フィールドでの体験や担い手の皆さんから学ぶことの多さとその価値を改めて示したいという思い、そして、フィールドから離れてこの分野のアートマネジメントの方法論を検討するのではなく、フィールドとともに歩みながら、フィールドに還元できる方法論を検討していきたいという思いからです。

本事業の前に実施した「日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成～「伝統×伝統」、「伝統×現代」、「伝統×地域」のクロスオーバーによる新たな価値の創出を目指し

て～」(令和元年度～令和3年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」採択事業)では、受講者が、文化行政や文化施設関係者から、伝統音楽・伝統芸能団体、教育機関、実演家、ベテランのアートマネジメント従事者、学生まで多岐にわたり、3年間の事業をとおして、伝統音楽・芸能に対する関心の高さとジャンルの幅広さ、そして全国的にこの分野のアートマネジメント人材育成が求められていることが明らかになりました。

また、ここで再認識されたことは、日本とアジアの伝統音楽・芸能のアートマネジメントが担う役割の範囲が、公演やワークショップの企画・実施という範囲を超えて、「伝統音楽・芸能を今日の社会につなげ、且つフィールドにおける伝承を未来につなげることまでを含むもの」である点でした。こうした「社会につなげ、伝承を未来につなげる」アートマネジメントの役割は、伝統音楽・芸能分野において、伝統音楽・芸能の鑑賞という枠から大きく踏み出した地域のアイデンティティを再認識する機会の創出という点で、今後、より重要になることが予想されます。

あわせて、国内の文化政策の方向性として、文化芸術基本法、文化財保護法の改正を経て、地方創生を目的に各地の伝統音楽・芸能をまちづくりへ活用する動きが活発化し、伝統音楽・芸能を地域全体として継承しながら活用できる人材が各地で求められるようになりました。また、地方創生の動きの中では、各地における異文化コミュニティとの共生と包摂についても取り組むべき喫緊の課題として重視され、当該コミュニティの伝統音楽・芸能はそれらの課題解決に資するという点においても重要となってきています。

以上より、本事業では、伝統音楽・芸能について、伝承を担うフィールドとの関係性のうえにアートマネジメントの方法論を構築することを主たるテーマに、音楽・芸能の伝承や地域社会が抱

える課題に対応し、且つ伝統音楽・芸能を地域レガシーと捉えて伝統を継承しつつ新たな価値や複眼的取組を創出できるアートマネジメント人材を育成することを目指しました。3か年に実施したプログラムは以下のとおりです。

【令和4年度】「フィールドからまなぶ」とし、制作者が企画を立案・構成するにあたって、伝統音楽・芸能を伝承する個人・組織やそれを支える地域コミュニティを含む「伝承を担い未来につなげるフィールド（伝承を担うフィールド）」に足を運び学ぶためのプログラムを展開しました。

【令和5年度】「フィールドとともにつくる」とし、「フィールド」を、令和4年度と同じく伝承を担うフィールドと、新たに文化芸術基本法にも有機的な連携が図られるべきと明示されている福祉や教育、多文化共生等の「連携し多様な実践を展開するフィールド（実践を展開するフィールド）」の二つを設定しました。二つのフィールドから学んだことを活かしながら、伝統音楽・芸能と社会をつなぎ、伝承の未来につなぐことを視野に入れた企画制作の手法を検討し展開しました。

【令和6年度】「フィールドと地域をつなぐ」とし、伝統音楽・芸能を各地の地域レガシーと捉えつつ、自治体等と協同で長期的視点から各地域の課題を解決し地域アイデンティティの共有を促すための方法論を探求し構築することを目指し、企画の実践を行いました。

本書は以上令和4年度～6年度の事業の集大成であるとともに、令和元年度～令和3年度事業の集大成として刊行した『日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメントハンドブック』（東京音楽大学文化庁補助事業推進室編／令和4年刊行）の2巻目にあたります。本書の内容は事業の中で各年度に実施した各講師による講座や対談、企画制作研修を基本としながら、二つをあわせて読むことでより広いニーズに応えることを目指して構成と内容を検討し、4部構成としま

した。

■第1部：全体論 — 伝統音楽・芸能を地域へつなぐマネジメント

伝統音楽・芸能に関わる政策や制度、支援機構等を体系的に示すとともに、多文化共生・社会包摂における伝統音楽・芸能の役割について示した。

■第2部：フィールドからまなぶ

日本・アジアにおける伝統音楽・芸能の継承について、祭囃子、民謡、儀礼、競技会、移民社会など様々な事例から示した。

■第3部：フィールドとともにつくる

社会における伝統音楽・芸能の多様な実践例とそこにおいて求められる役割について、担い手やアーティスト、コーディネーター等の様々な立場から示した。

■第4部：フィールドと地域、フィールドとフィールドをつなぐ

「地域」に焦点をあて、地域において伝統音楽・芸能を核とした社会包摂、教育、文化コミュニティ形成、多文化共生の実践事例を示した。あわせて、本事業で講師と受講生がともに企画を立案し実践した三つの企画制作研修の報告も示した。

本書を、「社会につなげ、伝承を未来につなげる」というアートマネジメントの新たな枠組みのもとで、伝統音楽・芸能の伝承に関わる皆さま、地域で様々な社会的課題に取り組まれる皆さまに少しでも役立てていただければ幸いです。

伝承を担うフィールドからまなび、ともにつくり、地域へつなぐアートマネジメント人材育成事業

統括 福田裕美